



2009年11月25日放送

漢方医人列伝「香川修庵」

北里大学東洋医学総合研究所 副所長 村主 明彦

香川修庵（秀庵とも）は、名は修徳、字を太沖といたしました。修庵は号です。堂号を一本堂と称しました。1683年、天和3年に播州姫路に生まれました。14歳ごろより朱子学を学びましたが満足を得られず、18歳で京に上り伊藤仁斎の門に入って3年間古学を修めました。その後、修庵が医学を志したのは、「聖賢の教えはつまるところ、身を修めることが基本であり、身を修めるには無病ということが肝要である。病身では忠孝の道もなすことができないし、ましてや道を人に教えることなどできない」との自己の確固たる信念に基づいてのことです。「医者の不養生」を地でいく医師の多い現代社会への警句として捉えると面白いものがあります。

このように、修庵は仁斎より学んだ学問を実践するには、先に述べたまず自身を病邪から守らねばならないとの考えより医学を志し、後藤良山の門に入り、5年間にわたりその薫陶を受けることとなりました。ことほど左様に、修庵にとって、人生の目標は聖賢の道一筋であるといっても過言ではありませんでした。良山の下、よく勉学に励み、『素問』、『靈樞』、『難経』から、隋、唐、金、元に至るまで、古今の医籍をほとんど渉猟しつくしました。その結果、「古今の医籍、特に『素問』、『靈樞』、『難経』などに書かれてあることは実際の医療には役に立たない邪説である」とし、これらのすべてが信をおくには足りない

まで結論づけるに至りました。

われわれが漢方のバイブルと貴とぶ『傷寒論』とて例外ではありません。「張仲景の『傷寒論』の医説は、正に信すべきことに至ったが、惜しむらくは、その理論は『素問』より出でて、陰陽者流が混在し、一、二の誤謬妄説もある。まことに千載の一大遺憾である」として、『傷寒論』のみが群書に勝って優れてはいるものの、それでもなお『素問』流の陰陽論の影響を受けていることを批判しています。結局、修庵は二千年の歴史を通観して、ついに師表と仰ぐ先人にも規範と仰ぐ書物にも遭遇できなかつたと嘆じています。

一方、これほどの知識の備えがあれば、己を殺し虚構の医論を尤もらしく展開すれば、富も名声も得られそうなものですが、修庵は己の信念を貫き通し、決してそのような行動には走りませんでした。これには、修庵の師でもあった伊藤仁斎が、儒者が医者兼ねたり、医者が儒者の真似をしたりすることを、非難を込めて批判した背景があります。

「人の名を騙って世間を欺く者のなんと多いことか。世間には儒医と称する輩がいるが、医者のかせに儒者を装うのは、医者が巫現賤工（すなわち巫女、職人）と同列視されるのが恥ずかしくて、ひそかに儒者の仲間に入り、その名を飾ろうとしているのである」と手厳しい。「そのような次元の低いことは論ずるに値しないが、腹が立つのは、何回も落第して自力で立てない者が、儒者から逃れて医者となり儒医などと自称することである。昔、孔子門下の高弟 70 人のなかには、大賢碩学が少なからずいたが、生活に困ったからと言って医業を兼ねたという人は聞いたことがない。今の儒医と称する輩は儒者にして儒者ではなく、医者にして医者ではない、何だかわけのわからぬ存在である。だからといって、医者が儒学を修めていけないということではない。いけないのは儒者が生活の援けに医業をしようとするのだ」と論破し、現代の医者であるわれわれにとっても、辛辣な意見となっております。修庵は「異端邪説で己を修め人を治めて、たとえ岐伯、扁鵲ほどの名医になったとしても、そんなことは自分の望むところではない」との言葉に、その高潔な人柄が偲ばれます。

このように古今の先人の説、医籍に失望した修庵はその後どのような行動に出たのでしょうか。彼は行き詰った展開の解決法を慣れ親しんだ儒の思想に求めました。「王道たる日常の養も、権堂たる万疴の治も、孔子、孟子の数言の中にあり」と主張したのです。聖道と医術は一本であることを唱え、孔孟の教えを十分に学べば医学上の基本的な原理はことごとく得られるとの考えを持ち、そのうえで、本草や古今の医書を学んで採るべきところをとり、これを親試実験によって確かめれば新しい医療の道が開かれると唱えました。いわゆる儒医一本論です。一本堂の同号はこの論に拠っています。これは修庵の独創にかかるもので、「我より古を作る」との名言はあまりに有名です。この言はいつけん高慢にも聞こえますが、決してそうではありません。「不遜なことは重々承知だが、やむにやまれぬ氣持ちでこの考えを表明したもので世の批判は甘んじてこれを受けたい」とまで言い切り、その覚悟の程を示しています。

しかし、予想通り修庵の考えは世に広く受け入れられるものとはならず、同門の山脇東洋からも「我もまた久しく旧医説を疑っている。しかしながら、これは古今の一大結構で、老人の批判などの及ぶ処ではなく、結論はいまだ決めかねている」と、諸手を挙げての賛成は得られぬままでした。このため、修庵は多くの門人を要しながらも、香川流の医術はその後に際立った発展を見せず、山脇東洋や別系統の吉益東洞の医術が古方派の主流として発展することとなりました。

修庵の主著には『一本堂行余医言』、『一本堂薬選』、『一本堂薬選続編』などがあります。『行余医言』は、修庵が自己の医術、医説を集大成した一つの医療全書です。「一本」の由来ですが、修庵は己自身の医学の基盤を創始し、それを一本の創始と呼んだところにあります。『行余医言』は香川流古方の神髄を示したものとして従来高く評価されています。

修庵がこの大著をなした直接の目的は、門下生の医学修習のためのテキストにしようとしたことですが、自著に明記されております。曲直瀬道三の『啓迪集』を意識したのではという見方をする向きもあります。1788年、天明8年の刊で、巻一は総論で診候以下、診断・調剤・治療の原則が述べてあり、全22巻からなっています。このうち巻五は精神神経疾患を述べていますが、当時の精神病学の書としては、世界最高水準にあったと山田光胤氏は述べています。

『一本堂薬選』は親試実験により修庵が認めた多くの薬物その他の効能や、薬物の鑑別などを集積したものです。全4編より成り、上編および中編は1731年、下編は1734年、続編は1738年等の刊です。修庵は実際の臨床価値、すなわち先に述べた親試実験を尊重し、『傷寒論』、『金匱要略』に用いられる薬物など計180種について、薬能・鑑定・自説を詳細に述べています。内容ははなはだ充実しており、その臨床上の有用性は今日でも高く評価されています。

修庵は治療の上で後藤良山の影響を大きく受けています。民間薬的な治療や温泉療法、灸法などを駆使して、必ずしも『傷寒論』にとらわれることはありませんでした。面白いところとしては、温泉に対する詳述がみられる点です。これは、戦乱から遠ざかって安寧を享受することができるようになった江戸の時代背景とも無縁ではないように思われます。このように修庵は机上の空論とも言うべき、がんじがらめの理論には拒絶反応を示す一方で、実地の医療に役立つ親試実験は積極的に実践したところに、彼なりの臨機応変の柔軟性がみてとれます。

1755年（宝暦5年）、修庵は播州に赴き、京への帰途、丹波で死去しました。享年73歳でした。京都嵯峨の二尊院に墓が現存しています。修庵の来し方を振り返ると、同じく古方派といっても、各人によって考えも異なり、その医療にも相当の隔たりがあることがわかります。共通しているのは、陰陽五行説に潤色された金元医学を排するという点ですが、

このことに関しても各人の対応は微妙に異なります。修庵はその中で最も先鋭的な方で、『傷寒論』まで含めて一切の古典を批判して、評価は別として、みずから新しい医学を創建するとの気概をもたらしたのです。

◆編集後記

村主明彦先生は平成 23 年 11 月 3 日にご逝去されました。よって本稿の校正は、総合監修者である小曾戸 洋（北里大学東洋医学総合研究所医史学研究部部長）が担当いたしました。謹んでご冥福をお祈りいたします。